

1

講演

10:30-12:00

「グループ表現セラピーのチカラ」&
表現セラピー体験

本シンポジウムのテーマである「コミュニティの再生とクリエイティブ・アーツ」に関連して、東日本大震災後イスラエルのアートセラピストとの連携のもと取り組んできた JISP (日本イスライド・サポート・プログラム) のヒーリング・ジャパン・プロジェクトおよび JICTER (日本国際トラウマ / (日本国際トラウマ / 緊急支援センター) のトラウマケア専門家養成のためのワークショップで得られた知見をお話したい。これらの WS はグループ表現セラピーの方法によっており、被災者の心のケアにとっても有益で侵襲性の少ない方法である。



講師 井上孝代
Takayo Inoue

九州大学大学院心理学専攻博士課程満期退学、博士(教育心理学)。病院・教育相談所・公共機関・企業などの心理職、近畿大学(短期大学)・駒沢大学・和光大学非常勤講師、家庭裁判所の調停委員や行政の各種審議委員などを歴任。1991 年より東京外国語大学留学生日本語教育センター助教授 / 教授。1998 年より明治学院大学心理学部教授 / 副学長、2013 年定年退職(名誉教授)。現在、井上孝代マクロカウンセリングセンター(MCC)代表。臨床心理士。【専門】臨床心理学、カウンセリング心理学、コミュニティ心理学、異文化間心理学【編著書・訳書】「留学生の異文化間心理学」(玉川大学出版部)、マクロ・カウンセリング実践シリーズ他多数。

ファシリテーター 井口雅子 Masako Iguchi
(アップコンセプト) 倉石聡子 Akiko Kuraishi

共に奏でること、それは共に生きること。
被災地におけるコミュニティ音楽療法の可能性について考える。

5 年前の東日本大震災。変わり果てた東北地方沿岸部の様子をテレビ映像で目にした時、私の頭に浮かんできたのは、ノルウェーの音楽療法家スティーゲの「コミュニティ音楽療法は世界を変えるかもしれない、ほんの少しかもしれないが…」という言葉でした。あの時から、このシンボリックな言葉はひとつの希望となり、私のコミュニティ音楽療法の活動を支える柱となりました。コミュニティ音楽療法の目的はコミュニティに何らかの変化をもたらすこと。この分科会ではコミュニティ音楽療法の理論的背景をいくつかの方向から概観し、世界と日本での実践例をご紹介することからスタートします。その上で被災地でのコミュニティの再建や再生にコミュニティ音楽療法がどのように関わっていくことができるのか、被災地にどのような変化をもたらすことができるのかを、参加者の皆様と考えていきたいと思っています。



講師 井上勢津
Setsu Inoue

ソグン・オグ・フィオルダーネ大学音楽療法コース及びベルゲン大学修士課程修了。ノルウェー政府認定音楽療法士として、東京、神奈川、山梨、京都、東北沿岸被災地域などで定期的に活動を行っている。共訳書に「文化中心音楽療法(2008 年・音楽之友社)」、訳書に「わたしだって、できるもん!」(2009 年・新評論)などがある。東京音楽大学、東邦大学非常勤講師。

" 友だちを見捨てないキャンペーン " の展開 —プレイバックシアターによるいじめ防止授業の紹介—

プレイバックシアターは、観客から日々の体験談を聴き、それを役者がすぐに舞台上で再現する即興劇です。劇団プレイバックーズでは、全国の学校を訪問し、年間 50 回以上の「演劇によるいじめ防止授業」を行っています。友人の、いじめにまつわる体験を劇として観た子どもたちは「そんなに辛かったんだ」と気づくことができます。また、子どもたちが劇に加わり、いじめを止めるための行動を練習することで、いじめの傍観者をなくすことを目指しています。子どもたちには、「友だちを見捨てないキャンペーン」として、授業後もこの行動を継続してくれるよう呼びかけます。この分科会では、90 分間の授業の構成や、子どもたちから語られた体験談、いじめを止めるための子どもたちのトレーニングの様子を、映像、講義、体験を通してお伝えします。

講師 小森亜紀 Aki Komori
(劇団プレイバックーズ)



中学時代にプレイバックシアターと出会い、学生時代に劇団プレイバックーズ入団。北里大学作業療法専攻を卒業し、作業療法士として働きつつ、2006 年、スクール・オブ・プレイバックシアター日本校を卒業。2011 年より同校講師をつとめると共に、子育て中の母親、医療福祉分野で学ぶ学生に向けてのワークショップや、プレイバックシアター劇団の指導を行う。

『DV』という孤立からの再生 ～アートが生み出すつながる感覚～

人と人のつながりを感じることで自然と「コミュニティ」が生まれることが多いですが、私たちはどのような経験をするとそのコミュニティから切り離されたような孤立を感じるのでしょうか? 人に共感してもらえる機会が少ない経験をすると、コミュニティから孤立し、辛い思いをすることは少なくないと思います。DV は自分の心とのつながり、そして人とのつながりにも影響を与え、子どもも大人も、孤立を覚えやすい経験の一つだと言えます。アートは、自分の心とのつながりや人とのつながりを取り戻す過程に役立つ方法の一つですが、アートと「コミュニティ」について一緒に考えてみませんか?

講師 辻 美七子 ロビン
Tsuji Minako Robin
(NPO 法人レジリエンス)



Marylhurst University 大学院 アートセラピー・カウンセリング修士。ポートランド市立小学校内の児童カウンセリングセンター等で研修を積み、2003 年に日本へ。さまざまな対象年齢と現場でアートセラピーグループの提供を経て、現在は NPO 法人レジリエンスで DV・トラウマの背景がある子どもや女性向けにアートセラピーグループを提供する他、地域でのワークショップに関わる。

分科会

13:00-14:30

全 3 種類!

3

全体会 / 交流会

14:45-16:30

分科会の講師と共に各会の報告を共有した後、ダンスセラピストと共に身体を通して振り返りを行います。

「dance, dance, otherwise we are lost (踊り続けなさい。自分を見失わないように)」——ドイツ人振付家の亡きピナ・バウシュが残した言葉です。踊る時、私たちは自分自身のからだと共に生き、その肌の熱を通して、世界の中で他者と共に存在していることを体感します。まさに「コミュニティ」が生まれる瞬間だと思います。自分自身を受け入れながら、自分とは異なる他者を受け入れることを体験するのです。踊りには、価値観や興味の違いを超えて人と人との関わりを育む力があります。参加者のみなさんと、パイタリティあふれるコミュニティの創造をしていけたらと願っています。」



講師 神宮京子
Kyoko Jinguu
(群馬病院、DMTlab)

ニューヨーク市立大学ハンター・カレッジ大学院にてダンス/ムーブメントセラピーを学び、1996 年修了・資格取得。帰国後は群馬県の精神科病院を中心にダンス/ムーブメントセラピストとして勤務。保健センターにおける母子領域や看護大学での授業にも携わる他、都内・各地でワークショップやトレーニング・セミナーを実施。ダンス/ムーブメントセラピーの様々な可能性を開拓中である。

主催団体について

APCONCEPT (アップコンセプト)

「表現を通して心の成長と回復を」をモットーに、クリエイティブ・アーツ・セラピーの考え方や実践を生かした各種講演やグループ活動などを行っている。2016 年 3 月、杉並区にアートセラピーのアトリエをオープン。個人・家族セッション、グループセラピー、グループスーパービジョンなどの臨床的なプログラムに加え、親子向けワークショップ、誰でも参加できるオープンアトリエやワークショップ、アートを通して地域とつながるマルシェなどのイベントも開催。http://apconcept.jp、facebook「apconcept アップコンセプト」

クリエイティブアーツ・セラピー(CAT)

諸芸術を治療や支援に意図的に用いる諸芸術療法の総称である。主なものには、アートセラピー、ダンス・ムーブメントセラピー、ドラマセラピー、ミュージックセラピー、表現アーツセラピーなどがある。欧米では大学院レベル以上の教育機関でトレーニングを積んだ専門家が様々な分野で活動している。CAT の主な目的として、心身の不調やさまざまな障がい、機能の維持や改善、ストレスの緩和や予防、リラクゼーションの促進、モチベーションや生活の質の向上、行動の変容、自己洞察の深化、その他、自尊心や自己肯定感、主体性や柔軟性、創造力や表現力の向上などがあげられる。CAT は誰もが持つ創造性を活かすことにより、性別・年齢・障害を問わず、あらゆる対象者の自己成長や自己実現を目指し、医療・福祉・教育・心理・司法・産業の分野で幅広く柔軟に適用される。